
恋にいじめは付き物ですか?!

餅亜実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋にいじめは付き物ですか？！

【Nコード】

N4482L

【作者名】

餅亜実

【あらすじ】

従兄妹、兄弟、友達・・・。

私、彫津名 柚波の周りにはイケメン、美女が多い。

そのとばっちりが全て降りかかってくる・・・。

イケメンに囲まれて、いじめられて。

周りの歯車、そして私の運命の歯車が動き始めた・・・。

恋にいじめは付き物ですか？！〜キャラクターリスト〜（前書き）

すみませんっ！

少し訂正したので、お願いします！

恋にいじめは付き物ですか？！〜キャラクターリスト〜

彫津名 柚波 horituna yuzuna (13)

中学1年生。無口に見えるが本当はただの人見知りで

人と接するのが苦手。

もうアメリカの大学を卒業している。

衣豆乃とクラス女子にいじめられるが零羅の助けで

いじめられることが無くなった。

家庭ではとても優しくただひたすら他人の為に努力する人。

でも実はかなり喧嘩に強い。(姉しか知らない秘密であったりする。)

魅鑑 零羅 miyari reira (13)

柚波のクラスメイト。

可愛い系の顔立ちに男の子らしい性格の組み合わせが

モテる秘訣らしい。本人はあまり気にしていない。

柚波がいじめられているのを見て止めに入る。

本当は柚波に一目惚れだった。

桜 衣豆乃 sakura izuno (13)

柚波をいじめる。少しではなく、かなりのギャル。

化粧が濃いすぎるためあだ名が「キャバ嬢」である。

春品 紅葉 harusina momizi (15)

柚波達の先輩。静治の彼女。

結構美人で人気も高い。本当は柚波が可愛くて仕方がない。

舞南の親友同然の存在。年は離れているがとても仲がいい。

実は零羅の実の姉。

夜代伊 静治 yayoi seiya (13)

零羅の親友。

カッコイイ系のスポーツ男子な性格。

雄耶や零羅と一緒に居る事が多い。

柚波の従兄妹で零羅の幼馴染。紅葉と付き合っている。

海刷 雄耶 k a i z u r i y u y a (1 3)

眼鏡がバッチリ系のイケメン。女子の扱いに一番慣れている。

百面相な性格で、綺麗に使い分けている。

零羅の従兄妹で静治の幼馴染。彼女持ち。

彫津名 舞南 h o r i t u n a m a i n a (2 3)

萌南山学園1年2組の担任。

優しくて気立てがよい。生徒からは男女問わず人気あり。

どっちかって言うと男勝りなところが多い。

袖波の姉。静治の従兄妹。

草野 水樹 k u s a n o m i z u k i (2 5)

萌南山学園1年2組の副担任。

10代の男性のような童顔な顔つきだが、しっかりして

責任感がある。こちらも男女問わず人気が高い。

舞南に惚れている。

彫津名 雅 horituna miyabi (7)

柚波と舞南の弟。

しっかりもので啓兎の面倒を良く見てくれる。

萌南山学園2年生のリーダー的存在。

頭の良さは中学1年生並みで、テストは全て100点。

毎年どこからか大量のチョコレートをもたらって帰ってくる。

ホワイトデーは毎年1人にしか返さない様になっている。

彫津名 啓兎 horituna keito (4)

柚波と舞南の弟。雅が良く面倒を見ていたため

とても頭が良い。4歳にして小学3年生並みに頭が良い。

4歳にしてモテまくる容姿。

萌南山学園幼稚園年中。毎日バックの中にプレゼントが入れられている。

恋にいいじめは付き物ですか？！〜キャラクターリスト〜（後書き）

初めて投稿する小説の説明です。

これから、頑張っていきますのでよろしく願います！！

第1章「従兄妹と幼馴染は大変です!!」(前書き)

ここから本編です。
お楽しみください。

第1章「従兄妹と幼馴染は大変です!!」

（ 柚波 side ）

—— ドンッ!!

「い・・・た・・・何する気・・・？」

人気のない倉庫裏、いきなり連れてこられ押されて

そのまま後ろに倒れてしまった私。

彫津名 柚波と言う名前だが・・・

今、何気に女子にリンチされている。

「あんだ、静治さんの何よ。いつも静治さんに優しくしてもらって・・・」

そう、静治こと夜代伊 静治。私の従兄妹・・・で、

なにかと昔から私の面倒を見てくれるのだ。

優しくて格好いいとは思いますが、恋愛的にはあまり感情がないのである。

「静治くんによくしてもらってるからっていい気になんないですよ！」

他の女子からの怒声もたくさん聞こえてくる。

最近ずっと別の女子にいじめられている気がする。

「……でさー…なんだよねー…」

体育館のほうから声が聞こえてきた。

「……今日のところはもいわ。でも絶対許す気無いから!!」

捨て台詞を吐いて数人の女子が消え去って行った。

「……ま、いつか。」

毎日こんな感じで生活していて登校拒否にならないのは姉のおかげでもあった。

「……あ、居た。お姉ちゃん!!」

「あ、柚波。今から帰り？一緒に帰ろうか。」

私のお姉ちゃん。彫津名 舞南。

優しくてすこし男勝りな性格でもあるが、

美人、天才、運動神経抜群、料理はプロ並み。

なんともいえないくらい完璧で大好きなお姉ちゃんである。

私のことを心から心配してくれた。

私が静治の従兄妹であることから小学校の頃からイジメを受けていることを知り、

一週間ほどで教員免許取得の単位を稼ぎ、1ヶ月後には私の学校の教師になっていた。

そうしておねえちゃんはいじめを見つけると捕まえて校長にまで差し出したりした。

そんな感じでお姉ちゃんは私のイジメを止めるだけの為に、

教師の道を選んだのだったが、今ではとても自分の仕事に生き甲斐を感じてるようだ。

「また、柚波いじめられたのか？」

帰る途中、毎日のように聞かれるが本当のことであった。

「う・ん、まあ慣れてきたんだけど・・・。」

お姉ちゃんは中学に入っても私のイジメが合っていることを知り、

萌南山学園中等部の教員免許、それも特別な免許を1週間たらずで取得していた。

第1章「従兄妹と幼馴染は大変です!!」（後書き）

小説本編スタートしました。

見てくれているかたは何人居るでしょうか。

何かヒント、質問、アドバイスがあれば
言ってください！お願いします。

第2章「夜の出来事」

「絶対許さない・・・！」

お姉ちゃんはいつも真剣に考えてくれて嬉しい。

私にとって最高の姉だ。

「・・・ただいまー。」

「・・・うー。」

私と姉は4人暮らし。両親とも海外に出張していて居ない。

住んでいるのは私と姉、そして弟が2人。

弟はまだ4歳と7歳の少年だがともしっかり者で助かる。

正直言つて4歳の弟はもう字もかけるし何気に掛け算なんてすらすらと唱えられる。

私もはつきり言つてもう大学を卒業していたりする。

アメリカに1年間だが住んでいたことがあった。

その間に大学を卒業しているので学校の授業なんて若干遊びだ。

「おかえりー！！ ほら啓鬼！お姉ちゃん達帰ってきたよー！」

啓兎、私の弟だ。4歳の弟だがとても凜々しい。

そして今叫んだのはもう一人の弟。7歳の雅。可愛いようなカッコイイ様な・・・。

モテる知り合いを持つと結構大変だが弟は別だ。

この2人はとっても可愛い。私的には天使に見える。

「おかえり。お姉ちゃんコレどう解くの？」

啓兎は小4のテキストを黙々と解いていたらしい。

「雅に教えてもらって！今から夕飯作るから！」

「はい。」

私は制服をさつと着替え、エプロンを付け夕食準備に取り掛かる。

お姉ちゃんは教師だから今から生徒に返すプリントなどのまる付けをしなければいけない。

料理は好きだし、私にとっては楽しみな作業なのである。

「今日は・・・あ、肉じゃが決定！。あとはサヤエンドウで・・・」

こつこつと料理を進め、20分後。

「よし、雅ー、啓兎ー、お姉ちゃん。ご飯できたよー」

階段を駆け下りて来る音が半端じゃない。

地響きがするくらいだ。

「ゴッハンー!!」

雅が叫ぶ。

「雅兄ちゃ!きついつてば!」

「ちょ、押しちゃだめだつて!!」

お姉ちゃんが注意した、その寸前。

「うわっ!落ち・・・っ」

—————
ドガッツゴロゴロっバン!!!

雅が階段から落ちた。まあ毎晩コレだからもうあまり気にしてない。

「だいじょうぶか・・・?あの人たちは・・・。」

一方階段では・・・

「あ・・・たた・・・」

「あちゃー・・・大丈夫か?雅。」

お姉ちゃんが心配した。

「雅兄ちゃん・・・頭から血・・・出てるんだけど。」

「え。マジで。」

そして3人はゆっくりとダイビングに来た。

「な・・・何があつたんだ？雅は頭怪我してんじゃん・・・。」

私はすぐに応急処置を済ませて夕飯を食べ始めた。

「・・・はー。ご馳走様ー！」

お姉ちゃんの声が部屋に響く。

「雅兄ちゃん、人参食べてー！」

「え。いいの？じゃあもらおっと。」

こうして楽しい夜のひと時が終わっていった。

「・・・ふわああ・・・そろそろ寝ますかな。」

部屋で宿題を済ませベッドに寝転んだ・・・瞬間。

「いやっほ！！柚波！遅かったな！」

布団の下から出てきたのは静治。

びっくりしてベッドから転げ落ちてしまった。

「ななななな・・・なんでいるんだ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「おっと、それ以上声だしたら怒られるよ。」

いや、おまえが来なければそもそもこんな声を出さなかっただろうに。

「おまえにさ、会いたいって言ってるやつが居たんだよ。それを言いに。」

「いや、分かったから帰ってよ。なんで来る必要が・・・」

途中でお姉ちゃんが部屋に入ってきた。

「紅葉ちゃんのメイド知るため？」

静治は顔を赤くしてコクリと頷いた。

「それならそういえばいいのに。」

メイド教えてもらってから付き合えばいいのに・・・。」

お姉ちゃんはそういいながら

静治に紅葉さんのメイドを教えていた。

紅葉さん、春品 紅葉さん。とても美人で私の第2のお姉さんの存在。

静治と付き合っているが静治は最近携帯を

買って貰って、やっとメールが出来るらしい。

パソコンですればいいのに、と思ったが

静治の家は両親用PCしかないそうだ。

「紅葉さんに直接聞きゃいいのに。なんでお姉ちゃん？」

静治はもつと顔を赤くして言った。

「だって・・・なんか聞きづらいし、

電話番号知らないし・・・学校では秘密だし。」

うわｗｗもつともだ。

紅葉さんと付き合っているのは秘密、

学校ではしゃべれない、電話できない。

家も多分知らないだろう。こりゃうちに来るな。

「そろそろ帰りなよ。いい加減11時なんだな、もつ。」

私が言うと静治は、はっとした顔でお礼を言いながら消え去った。

「・・・寝よ。」

私は電気を消しそのまま就寝した。

第2章「夜の出来事」(後書き)

2作目、投稿してみました。

皆さんが楽しんで読めるように努力しようと思います。
お願いします。

第3章「イジメは男を使って？」（前書き）

第3章です！

第3章「イジメは男を使って？」

「おはよ……」

「おはよ、お姉ちゃん。」

啓兎は相変わらず起きるのが早い。

てか早すぎる。

もう少し寝てたらどうなんだ。

「今、小5のテキスト解いてんの。」

4歳にして小5のテキストかい。

まあうちも人んこと言えないが。

「あ、朝ごはんの支度するから待ってね。」

「はい。」

私はすばやく制服に着替え、髪を櫛でとかし、

朝ごはんの支度を始める。

そして20分たった頃。

「ま、舞姉、離してよっ！ー！ー」

「嫌だね。あんたは私が頂いたー!!」

朝から格闘ごっこをしているお姉ちゃんと雅。

「・・・朝ご飯、冷めちゃうよ。」

私の一言で2人とも素早く席に着き

マツハの速さでご飯を食べ始めた。

ガツガツツ・・・モグモグ

「・・・む、これはアレだ。松茸!!」

さすがお姉さま。あの早さで食べて

松茸が入っているのに気づくなど。

なぜ松茸が入ってるかって？

それはね・・・。

—— 先日の晩

「ありがとうございます！舞姉さん!!」

静治はお姉ちゃんに感謝のお礼をし

お土産に、だと言って松茸を置いていったのだ。

「あ、これ。親父のお土産なんで。どうぞー!」

静治は何気にお姉ちゃんの信者でもあったりする。

お姉ちゃんは遠慮などせず、嬉しそうに松茸を頂いていた。

「ありがとうございます!コレで何日かは豪華なごっはん」

盛り上がっているお姉ちゃんを置いて静治に告げた。

「もう用は済んだの?なら帰ってよ。ここ私の部屋なんですけど。」

静治は今気づきましたみたいな顔をして窓から自分の部屋に

そそくさと戻っていったのだ。

コレが松茸のある理由。

前回は少しカットしちゃったんだよ。

作者が忘れてて。(うわ、言うなー!by作)

「で、そろそろ学校行かなきゃじゃない?」

「「「あ」」」

ご飯を食べていたお姉ちゃん、雅、啓兎が

箸を止めて荷物を持ってすぐさまに家から出て行った。

「い、いつてきまーす!!」

お姉ちゃんは急ぎ足で車に乗りスピードを出して走り出した。

その車には雅と啓兎も乗っていたのだが。

「・・・私は歩いて行けと。」

ボソツとつぶやきながら私は洗い物を済ませ

急ぎ足で学校へ向かった。

「・・・よし。着いた。」

学校までは10分。走れば6分で着く。

「・・・はあ。」

すると後ろから声を掛けられた。

「ちよつとあんたイイ？」

後ろを振り向くと「桜 衣豆乃」が居た。

桜 衣豆乃。クラスでも化粧が1番濃い。

中学生、それも1年が化粧なんて・・・おばさんか。

そして伊豆乃のあだ名は「キャバ嬢」。

本人は気づいていないけど皆そういつている。

そして更にこの人は大バカだ。

自分がモテていると思っている。まさか、その逆だったりする。

それでも皆衣豆乃に逆らえないから私を虐める。

・・・って馬鹿いんだよ。

「ちょっと聞いてんの？」

伊豆乃は私の襟を持ち上げそのまま体育倉庫に連れて行った。

バンツ。

ものが床に落ちるような音がした。

私が体育倉庫の中で床に叩きつけられた。

「つつっ！！たあ・・・なに・・・」

ガシヤツ。

何かがかかると音がした。

扉の鍵が閉められていた。

私がどれだけ叩いてもあかない、蹴ってみただけど

まったく反応が無い。

「誰かー。居ませんかあ!!」

「は、誰も来ないわよ。バーカ」

「静治くんとか零羅くんには近づいてるからよ!」

いや、零羅くんには近づいてないわ。

てかしゃべったこととか1回しかないよ、うん。

零羅こと魅鎧 零羅。静治の親友、幼馴染だ。

あまりしゃべんないけど静治より美形だよ。

・・・てか、そんな場合かあ!!

「あ、開けなさいよあ!!」

「頭冷やしてなさい!あははっ!!」

声が遠ざけていった。

「・・・う・・・そお・・・今日はピザ食べようと思って
静治に頼んでおいたのい・・・」

すると後ろから声が聞こえてきた。

「・・・君、彫津名 柚波ちゃん？」

でい！誰なんだ？！こんなときにい！

「そつですけどー！！」

「そ、じゃあ頂きます」

1人の男の声が倉庫に響き、私の視界が暗くなった。

「え、な・・・なに？ ん？！・・・！！！！」

私の口にした生暖かい感触

体が凍りついた

「ん・・・ん・・・」

ガジッ

「でえー！！」

口に入って来た舌を思いつきり噛んだ。

それはそれは痛いでしょう。相手のほづが。

自業自得だと思っけど。《笑

「・・・くそっ犯してやる・・・」

え、ヤバイ、変な方に持っていつちやったよ。

「待って、ちょ、やめろお！」

私が叫んだ、その瞬間だった。

バキッ。

「大丈夫か?!彫津名さん！」

零羅君だった。

「な、誰だお前！」

やあ、私的にはあなたのほうが誰だってんの。

「う、わ!・・・おい。彫津名さんになにした。」

零羅君は基本的可愛い系の顔をしている。

でも今はまるでカツコイイ系の顔だ。

・・・て、関心してる場合か!

「じゃ、邪魔すんな!！」

私を襲おうとした男が零羅君に殴りかかった。

「ちよ、やめ!!」

私が言うまでもなかった。

零羅君は見事に拳を避け、

男の後ろに回り、背中を殴った。

「ぐはっ！」

男は情けない声を出してその場に倒れた。

「。。。。」

零羅くんって強いんだなあ。。。

「。。はあ。。だ、大丈夫？彫津名さん。」

「へ、あ、はい。」

零羅君の意外な一面を知った。

第3章「イジメは男を使って？」（後書き）

すこし変な男が出てきましたが
男は今回が最後じゃないですよ。
また出てきますから。あはは。

第4章「一目惚れ。」(前書き)

第4章です。

しゅっくろくしゅいぞ。

第4章「一目惚れ。」

（零羅 side）

俺は初めてあんなに綺麗な人を見た。

魅鎧 零羅。中学1年の健全な男子である。

身長165?、体重47kg。得意なことは空手。

俺の初恋はいわゆる「一目惚れ」であった。

1年前の春のこと。

俺はいつものように静治と雄耶の家で遊んでいた。

雄耶こと、海刷 雄耶。

雄耶と静治と俺は生まれながらの幼馴染であった。

静治の家にはカードゲームの種類が数多く揃っていた。

だからあの日も3人で遊んでいたんだ。

「やった！俺の勝ちだぜ！見たか雄耶！零羅！」

いつも負けていた静治が勝って雄耶が少しがっかりしていた。

「くっそう・・・静治には負けたくなかった。」

「まあまあ、落ち着け雄耶！」

俺は雄耶を励ましてもう一度ゲームをするつもりだった。

そこに現れたのは、俺が心から初めて可愛くて綺麗だと思った人。

「ねえ、静治。教科書貸してー。」

静治の部屋の窓が開き、外から女の子が入って来た。

「へ、ああ・・・ランドセルの中だよ。持ってっていいぜ。」

静治はそういつてゲームを再開していた。

でも俺は目が離せなかった。

可愛くて

綺麗で

でもなんだか勇ましくて

見とれていた

本人は気づかずそのまま窓に消えていった。

「・・・おい。零羅ぁ・・・生きてるか？」

雄耶に呼ばれて我に返った。

でもあの子の事は忘れられなかった。

帰る前、静治に聞くと、従兄妹だと言うことが判明した。

名前は彫津名 柚波。とても頭がいいらしい。

俺が静治を羨ましいと思ったのはコレが初めてだった。

それからずっと俺は彼女のことを想っていた。

静治しか知らないこの気持ち。

俺は誰が告白してこようと眼中にはまるで無かった。

それは1年後、つまり今現在も同じことだった。

ある朝、彫津名さんがキャバ嬢、桜 伊豆乃に

連れて行かれるのを目撃した。

すぐに行こうと思ったが周りに居た女子のお陰で10分間

身動きが取れない身だった。

やっと解放されたと思えば倉庫から声が聞こえてくる。

「・・・くそっ犯してやる・・・」

そういった男の声が聞こえてきた。

俺は倉庫の扉を蹴飛ばした。

見事に扉は破壊〜！

・・・思ってる場合じゃない！

「大丈夫か?!彫津名さん!」

案の定、男は彫津名さんの服を掴み

馬乗りになっていた。

好きな子が見知らぬ男に乗っかられてて

黙ってられるか。

「な、誰だお前!」

それはこっちの台詞だボケやろう!!

「う、わ!・・・おい。彫津名さんになにした。」

彫津名さんは服が少し脱げていて下着が見えてた。

あんの男、許さん!

て、まあ切れてしまいました。

「じゃ、邪魔すんな!!」

男の方は俺に殴りかかってきた。

コイツは馬鹿だ。

実は俺は「全国空手協会 空手選手権」という

空手の日本選で優勝したのだ。

「ちよ、やめ!!」

彫津名さんは止めようとしたらしいが

何気に俺は相手の攻撃はすんなりとかわし

代わりに背中にパンチをお見舞い。

「ぐはっ!!」

男の倒れ方があまりにも情けなくて笑いそうだ。

「.....」

あ、やば!! 彫津名さんは?!

.....無事だ。

「・・・はぁ・・・だ、大丈夫？彫津名さん。」

「え、あ、はい。」

戸惑いながらも俺に近寄ってくる彼女の姿は

あまりにも可愛くて 綺麗で

本気で理性が保てない・・・（やばいぞー!!）

「あ、の・・・助けてくださりありがとうございます。」

少しだけ頭を下げて上目づかいで俺を見ている。

「へ?!・・・あ、別に・・・怪我はない?」

顔が赤くなりそうなのを一生懸命に隠す。

いわゆる照れ隠しだ。

その後、俺はありのままを静治に話すと

翌日から、彫津名さんはイジメが無くなったそうだ。

「あの、少しいいですか?」

彫津名さんから誘いがあったのは

いじめが無くなった4日後であった。

第4章「一目惚れ。」（後書き）

よんでいただきありがとうございます。どうぞご愛読ください。
感想など、お待ちしております。

第5章「あの人の気持ち」(前書き)

5章突入！

見ていってください。

第5章「あの人の気持ち」

（柚波side）

私は呆然としていたが早く逃げないとまた襲われる！！

と思い、零羅さんに駆け寄った。

「あ、の・・・助けてくださりありがとうございます。」

零羅くんは顔を赤らめて早口で言った。

「へ？！・・・あ、別に・・・怪我はない？」

なにがそんなに恥ずかしいのか分からないが

とにかく崩れた制服を着なおそう。

その後、私は1日ずっと平凡な日々を送った。

でも変なことに私へのいじめはまったく起こらなくなった。

お姉ちゃんによると零羅君が静治に伝えて

静治が釘を刺したとか。

「あなた、よく魅鏡に好かれてるね・・・2年間だよ」

私は零羅君を空き教室に連れて行った。

「……で、何？」

零羅君は少し戸惑いながら私に言った。

零羅君、この人は普通るとき可愛い顔してかなりモテる。

私の好みでもないが嫌いとかでもない。

中身が男の子……と感じだから

格好可愛い……かな。

「……あの、お姉ちゃんは零羅君が私を好きなんだって
言ってたんですけどどういことですか？まさか、私のことなん
て」

直球すぎる私の話の途中から零羅君は顔が真っ赤になり

小さく口を開けて言った。

「……ほんとだよ。俺は彫津名さんのこと2年間ずっと好きだった。

「……」

マジですか。

てかなんで2年間？

「私、零羅君に会ったの中学が初めてでは？」

「・・・2年前に1度会ったことがある。」

何処であったのか、いつからだったのか、

私は零羅君に話しを聞いた。

・・・2年前。

そうだ、私は中学に入るまでアメリカの首都に住んでいたんだ。

そして5年の頃だっけ、1度こっちに帰ってきた。

その時私は小学校の教科書なんて持っていなかったから

静治に借りにいったんだ。

「ねえ、静治。教科書貸してー。」

そういつて静治の部屋に窓から入って

ランドセルから教科書を持って出て行った。

その時、部屋には静治の友達が居たみたいだったな。

ああ。その友達が零羅君だったのか。

「・・・それからずっと彫津名さんのこと忘れられなくて

そして現に至ります。はい。

・・・いいのか？

「・・・う。俺は今でも彫津名さんが好きだったんだよ！
だからあの時助けたんだって！！！」

「わあ?!」

あまり大声で言わないでえ〜！！！！

かなり恥ずいって！

「ちょ、ちょっと静かにな」

私は零羅君の顔に手を当てた、その時だった。

「えっちよと、あわあ！」

ドンッ。

「あたた・・・あれ？」

あまり痛くない。なんで？

・・・下には零羅君が。

「え？あっごめんなさいっ」

「・・・いいよ。このままでも。」

はい?! 私がよくありません!

この姿勢はちよつと・・・;

あ、足がちよつと零羅君の足に絡まっちゃってるし!

これじゃあ私が零羅君襲つたみたいじゃん!

・・・てか最近私キャラ変わった?

「つて、やっぱ降りる!」

私が零羅君から退こうとした時だ。

「なんで。」

零羅君は可愛い声で私の耳に囁きそのまま腕を引っ張った。

「!...ちよ、離しっ」

零羅君の腕の中に引きずり込まれて

私は恥ずかしい中必死にもがくが零羅君は

小さい割りに力が強い。

動けなかった。

「もう少しだけ・・・」

零羅君の香りが私の鼻についた。

なんだか落ち着く匂い。

私はそのまま零羅君の腕の中でいつの間にか寝ていたのだった。

第5章「あの人の気持ち」（後書き）

次回は「雄耶の出番」です！

雄耶の出番は基本少ないですが

今回は雄耶 side でいきます！

お願いしますっ

第6章「雄耶の思い出〜雄耶side〜」(前書き)

雄耶編スタート!

第6章「雄耶の思い出」雄耶side」

「雄耶side」

海刷 雄耶。誕生日は9月20日。

身長169cm、体重50kgジャスト。

何気に1回しか本編に出れていない一応メインキャラなのに…。

「……出番が少ない。」

俺は静かにつぶやいた。

「どうしたんだよ、雄耶。」

零羅は疑問を抱き俺を見ていた。

「あ、いや…別に。」

なにかしら過去の話にしか出ていない。

くそ。零羅と静冶にばっか出番とられてるし。

よし、ここは過去とか話して俺のことを良く知ってもらおう。

これはまだ俺らが小学5年の夏だった。

生まれたときから一緒だった静治、零羅は

生まれながらの親友でもあった。

「おい！雄耶。キャンプ行こうぜ！」

ある日静治が聞いてきた。

「え・・・いいけど、零羅は？」

「今から聞くんだよっ！」

静治はにこやかな顔で言った。

「あ、俺無理だから2人で行って来て」

「えーっっ!!！」

電話をかければ断られ静治は泣きそうな顔で言った。

「あ・・・その日は、家族で旅行。」

零羅はけるっとした声で静治に発する。

「んじゃ2人でいこうぜ。」

俺は面倒くさいので提案したがやっぱり静治は3人が良いみたいだった。

「えー!いやだあ!3人でいこうぜ!！」

いやなあ・・・そんなこといったよう。

まあしょうがないだろう。

「まあまあ、お土産買ってくるし。2人で行ってきなよ」

「・・・わかった。2人でいこうぜ。」

静治はそう言っただけで、すっかりして俺の部屋に戻っていった。

「・・・ということだから、まあ気にするな。」

静治と代わった電話で俺は零羅に言った。

「ああ、ごめんな。土産買って来るからなあ。」

「じゃあな・・・はあ。」

電話を切った後、俺は部屋に戻りキャンプの用意を始めた。

部屋に戻ったときにはもう静治は帰っていたんだが。

そしてキャンプ当日。

「こつちだぞー！」

静治がキャンプのロッジの前に立っていた。

てか何人居んだよ；

「はぁ・・・なんか女子多くね？」

いや、半数女子だしな。

ヒデエよ。なんか20人居るんだけど13：7だよ。

「ね、雄耶くん？一緒に川にいこ？」

1人の女子が話しかけてきた。

女子って言ったってなんか可愛くないし。

「は？いやだよ。俺、静治と遊ぶ為に来たんだし。あと男子なら。」
すると静治が話しかけてきた。

「おいおい、もうちょっと遊ぼうぜ雄耶。」

てか俺は何でキャンプに呼ばれてんだ？

大体最初は2人で行くんじゃないか？

「ああ、だって2人じゃ楽しくないだろうっ！」

うわw・・・心読まれたあ！

「だって・・・女子あまり可愛くないぜ？」

そう、俺は可愛い子としか遊びたくない。

「あ、もう一人いるぜ女子。」

え！まだいんの？！・・・またブスだろっ！

「あ、あの子だよ。」

はあ・・・またか・・・？！！！！！！

「ななななな、なんであんな奴がいるんだ？！」

俺は焦りながら小声で静治に聞いた。

「へ、ああ。あの子はクォーターだから顔つきがいいんだよ。」

てかあんなの俺の学校に居たっけ？！

「いや、あの子は俺のはとこ。」

ふと思った。なんで静治の周りってすごい奴ばっかなんだろう・・・。

「あ、名前は・・・坂安 乃恵（さかやす のえ）。」

の・・・え。なんか可愛い子だな。

そう、そういえば俺は3人の中で1番女慣れしていたりする。

てか小5でなんでそんなに慣れているかって？

それは俺のねーちゃんのせいだ。

「お姉ちゃあん！それ、僕のお菓子い！！」

物心ついたときにはすでに姉に遊ばれていた俺。

「へっへーん。んじゃ、お姉ちゃんの口まで取りにこーい！」

「え？！」

最初はびっくりしたが俺のお菓子は俺のお菓子。

すぐにねーちゃんのところまで言って口まで取りに行った・・・らしい。

んで、それからずっと姉の友達とか、おれ自身の好きな子とかに

「キス」と言うものをしていたとか。

まあそれ以外にも色々あったりしたが

今は何も言わないでおこう。

・・・で、その乃恵って奴とまずどう仲良くなるかだよな。

第6章「雄耶の思い出」雄耶side」（後書き）

はい！次回も雄耶メインでいきます。

少しだけでも活躍できた裕也の代わりに

柚波はまったく出番がありません。

柚「え、なんで?!もう少し・・・てかちょっとくらい出してえ!」

はい、以上!

第7章「本気で恋?」雄耶side」(前書き)

今回が雄耶編の最後です!

皆さん、最後まで小さい雄耶をみてあげてください!

第7章「本気で恋？」雄耶side」

「・・・どうしますかな。」

俺は結構本気で考えた。

実を言うと本当の恋など若干したことがない。

なにかとキスとかしちやってるのに

本当に好きな子って居ないんだよな。

でもアイツ、乃恵は何かが違う気がする。

一目しか見てないが今までに無い感覚がする。

・・・・・・なんでだ？

「ずばり！お前は本気の恋をしたんだよっ！」

おわっ

いきなり静治が俺にそんなことを言ってきた。

「んな、わけないだろ。」

「さあどうかな？意外と本気だろうっな。」

大体初めて見た女に惚れるんだ。

そんなに柔な奴ではないぞ。

「そんなことより、ロッジに行こうぜ！」

とりあえず俺はロッジに向かった。

俺はこの時、初めて体験する感覚に

襲われるとも知らず。

「あ、静ちゃん！おそいつ皆待ってるんだよう！」

静ちゃん・・・ねえ。なんか可愛いあだ名。

「あはは、わりいな。雄耶がいつのまにかどっか消えてっからさ。」

それは言える。実は俺、

変な女の誘い断って、展望台まで行ってたし。

なんでかわかんねえけどな。

ついでに俺が眼鏡をかけ始めたのは

6年生からだっただから、この頃はかけてない。

「へー・・・この人が雄耶ね。まあ、静ちゃんよりはカッコイイね。」

ドキッ

あり？なんだよ、今の。

カッコイイとか今までに何回も言われてきたっつのに。

「うわっ酷いぜそれは。乃恵・・・もうちよっと考えて言えよ。」

静治は少し傷ついた顔で言った。

そりゃ周りの奴は皆笑ってた。

でも俺だけは笑ってなんか居られなかった。

なぜか顔が無性に熱い。

「・・・・・・・・静・・・耶・・・。」

「え、どうした？っておい！！雄耶？！」

バタッ

・・・・・・・・あれ俺はどうしたんだ？

あとどうしてこんな所に・・・。

「あ、気がついた？」

目を開けると乃恵が目の前、いやあと5センチくらいで顔がくつつきそうなくらい近かった。

「う、わああ!!」

びっくりして横に転がった。

運の悪いことに俺はベッドの端のほうに寝ていたらしい。

そのままベッドから落ち、頭を打った。

「つつつ…いてえ…」

「だ、大丈夫?!」

乃恵は結構マジで心配していたが

本当はそんなに痛くは無かった。

「大丈夫…だけど。」

「はあ…なら良かった。」

ドキッ。

ななな、またかよ。

なんだ、この感覚。

やばいやばい普通じゃない！

いつもの俺じゃないぞ。

「早くベッドに上がって、頭冷やさなきゃ。」

「あ、ああ。」

乃惠のことが・・・好き？

な、訳ないか。

「あのさ、雄耶は・・・」

あれ、もう呼び捨て？

早くないか？

「あたしのこと好き？」

はい？

「なんで？なんかその展開は速すぎるだろ。」

「・・・だって2年前から好きだったもん。」

え、でも会ったこともないだろ？2年前なんて。

「・・・前ね、静ちゃんに写真を見せてもらったの。
その写真に写っていた雄耶って人に惚れたから。」

あ、つまり俺って訳か。

「それから電話で静ちゃんから雄耶の事たくさん聞いた。
いいところも悪いところも、全部が好きになった。」

でも、なんだ？今まで告白されたって

ここまで恥ずかしいなんて思わなかったぞ。

「お前が本気で恋してんだよ！」

静治の声がよみがえる。

「まさか・・・な。俺は嫌いじゃないけど、
別に好きでもないと思う。」

「・・・そう。でも諦めないよ。」

乃惠の声は本当に「諦める」と言う思いは入っていなかった。

でもそう言った乃惠の顔はとても寂しそうだった。

ズキッ

初めて心臓が飛び上がるくらい痛んだ。

「じゃあ、また後で！」

乃恵は笑顔で走ってロッジから出て行った。

「あ、ちよつとっ……」

俺はどうすることも出来なかった。

キスした事あったってこんな時の接し方なんて

分かるかよ。

「ちつくしょう……なんかダサいな。」

俺はそのままベッドに倒れて寝た。

こんなときに静治と零羅が居ればどう励ましてくれるか。

「……おい。雄耶、そろそろ昼食だぞー。」

寝ようと思った所で静治がロッジに入って来た。

「ああ……行くー。」

「お前は乃恵を振っちゃった訳だ。」

「なっ！！」

静治はいつも痛いところを突く。

「だって今さっき乃恵が泣きながら俺のところに来て

「振られたみたい」って言ってたぞ

「やっぱありゃ振ったことになるのか。」

「お前だって女子のこと振るだろ。」

「お前さ、振った後なんか後悔したろ。」

びくっ

「な、なんでそうなるのか。」

「ああ言っても乃恵はモテるんだから、他のやつに襲われても知らないからな。」

「・・・そんなことどうだっていい。」

「俺はあいつなんて、ちょっと顔がいいだけで・・・。」

「って本当にそうだったか？」

「俺の本当の性格を知っても」

「優しくしてくれた、だろ。」

「なのになんか悪いことしちゃった。」

「どつするんだ？雄耶くん？」

静治は少し微笑んで俺に問いかけた。

「つく、お前は俺で楽しんでいるのかよ！」

「だっていつも俺がお前に遊ばれてるだろ！」

少し静治に顔が笑った。本当の笑顔で。

「・・・わーったよ！行きやいいんだろっ！」

「はい、その通り。いってらっさい。」

静治はまた悪魔見たいな顔で微笑んだ。

でもその中には静治の優しさも含まれていたんだろう。

俺は少し戸惑ったが走った。

やっぱり俺は乃恵って奴が好きなのじゃない気がする。

でも、何かが違う。

アイツは俺のことを全部認めてくれていた。

俺にとって「大切」に当たる存在なのかも知れない。

「あ、雄耶くんだ！どうしたの？」

俺は女子のロッジまで行った。

「乃恵は?!」

「え・・・ああ、あの子なら・・・ねえ。」

「うん。」

周りの女子が少しまずそうな顔で言った。

「おいつお前ら何か知ってんのか?!」

「あ、いや・・・」

こいつらは絶対なにか隠している。

そういえば男子のほうは誰も居なかった・・・。

って・・・もしかして?!

「あ、雄耶くん!!!!」

女子の声なんて無視、俺はキャンプ場の森公園へ走った。

一方乃恵は、

「いやっ離せ!やめてっば!」

「はい?何だって?お前は黙ってればいいんだよ。」

周りには男子が5人、乃恵を囲んでいた。

「やめっ・・・!!」

ビリッ

何かが破れた。乃恵の服だ。

上半身が下着だけになりとてもじゃないが恥ずかしい。

「や、やめてよ!こんなことしてっ」

「だからあ黙れって!」

たとえ小学生でも男子のほうが力が強い。

「いやあ!!」

男子の手が胸のあたりに迫ってくる。

「あ、あ、・・・!助けてっ雄耶ああ!!」

ゲシッ

「グハッ!」

乃恵の前に綺麗な蹴りと無残な男子の姿が映った。

「・・・ゆ・・・うや?」

「ああ、その雄耶ですとも。」

俺は少し格好つけて言ってみた。

「あ、コイツ静治のダチだっけ？んじゃヤツチャえ。」

残りの4人が一気に殴りかかってくる。

まあ俺は喧嘩目的じゃないし、

とりあえず拳を避け乃恵を抱きかかえ元来た方へ走った。

「ちよ、まてい！！」

「へ、お前らと戦うギリはないんだよ！」

俺がダツシユすると後ろの男子は追いつけず

途中から姿が見えない。

「・・・遅っ」

「あ、あの・・・雄耶？」

乃恵が少し控えめに聞いてきた。

「あ？何？・・・怪我は？」

「え、や、無いんだけど・・・」

あまりの動揺に乃恵は俺の腕から落ちそうになった。

「お、っと。危ねえっ・・・今さっきは悪かったな。」

「え？」

俺だって「え？」とか言ってみたいぜ。

でもこの場合は俺が言ってやる方なのか・・・。

「俺は・・・多分お前が好きなんじゃないか・・・？」

「はい？・・・あははっ！！面白い！！」

乃恵は笑い出した。

くそっよくも俺の初めての告白を・・・；

「私が言ったときは好きじゃないって言ったのに・・・
好きかも知れないって・・・順番逆でしょ！！」

乃恵は笑いながら、でも涙を流しながら俺に言った。

「・・・好きだよ。雄耶が。どんな子よりも、絶対に。」

乃恵の顔がほんのり赤くなり、にっと口を動かした。

「次断ったら許さないよっ！」

「・・・あ、ああ。ごめん・・・？」

「なんで、クエスチョン?!」

「・・・・・・・・・・ぷっ」

俺が今まで笑いたくて堪らなかったのと同じくらい

乃恵も我慢していたらしい。

同じタイミングで吹いてしまった。

「あ、ははは! 雄耶の本気の告白ってなんか笑えるよっ!!」

「ひ、ひど!! ぷ・・でもお前だって泣きながら俺に訴えたぞ!」

笑いが止まらないまま、俺等はロッジに引き返した。

で、そこで待っていたのは静治と、今さっき乃恵を囲んでいた

男子5人だった。どっから帰ってきたんだ・・?

「はいおつめでとーう!! 雄耶のマジの初カノ誕生!!」

「・・・・・・・・へ?」

1人の男子が大声でなんかかなり恥ずかしいことを・・。

もう1人の男子・・は、俺の飛び蹴りを食らった奴。

「あー・・もう痛かったぜ。静治の頼みごとって言ったってよう。」

今さっきの蹴りで痛めた腰を擦りながらそいつは言った。

「・・・おい、どういうことだコレは。」

「えへへ・・・実はこのキャンプ、遊びに見せかけて・・・」

「「雄耶ismマジカノをつくれ！大作戦！！」」

3人の男子が揃ってそんなことを言った。

て、ことは俺は静治にまんまと引つかかった・・・って訳？

「あつはつは！いつものお礼だあ！ま、よかつただろ。」

静治はのん気に言っつてその場をさっさと逃げ出した。

「・・・おい！！まて静治ああ！！！！」

その後、俺をハメた奴の背中に回し蹴りを食らわせた。

そりゃ6人とも腰を擦りながらキャンプ最終日を迎えた。

「なあ・・・なんで俺のこと好きなんだ？」

「え！！！！」

乃恵の顔が次第に赤くなる。

最終日の帰り、なぜか子供だけで電車に乗って帰っていた。

そういえばキャンプ中には大人に会わなかったなあ。

来てたはずなんだけど……？

「……それは、優しいとことかあ……？まあ……全部。」

んなことさらつと言えるのか、コイツは。

俺は言えないぞ、てか言いたくねえな……。

「全部つてマジで？んなわけないだろ。」

「マジ！ホント！！全部好き！」

乃恵が恥ずかしいことあまりにも大きい声で言ったから

周りに気づかれるところだった。

その日の出来事は今、現在にも関わり、

乃恵は現在の彼女である。

まあそんなところだろうか。

そろそろ本編に戻ったほうが良いかも知れない。

て、ことでまた会いましょう。

S
e
e
Y
o
u
A
g
a
i
n
!

b
y
雄
耶

第7章「本気で恋?」雄耶side」(後書き)

ありがとうございました！

次回からやっ和本編に戻ります！

次回からはもうちょっと雄耶の活躍を増やそうとおもいます！

これからもよろしく願いますっっ!!!

第8章「迷い子猫の縁結び〜猫神〜」(前書き)

本編に戻りました！

かなり久しぶりですがよろしく願いします！

第8章「迷い子猫の縁結び―猫神―」

〈柚波 side〉

ある日、私の前に現れた1匹の子猫が

私にまたしてもトラブルを呼び込んだ。

これは私の運命の歯車に異変が起きる前触れだったんだ。

「・・・猫？なんでこんなところに。」

零羅くんから告白されて一週間。

私は未だに返事もせず、そのままにしていた。

実際のところ、本当に告白されたのかも分からない。

気づいたら家に居たのだから。

お姉ちゃんの話によると、

「え・・・ああ零羅君があんたを家まで送ってくれたのよ。」

と言っていたのでまあ本当だろう。

そう思っていれば一週間たち、

今に至ったりする。

「……にゃあ……」

どこの猫ちゃんかなあ……

あ、可愛い。顔をこすり付けている姿は紛れもない子猫の顔だった。

「体は大きいのに子猫だったのかあ……」

少し関心を持ちながら、子猫を抱えて家に連れて帰った。

子猫の首に巻いてあったリボンは

私の運命のリボンだったのかもしれない

「ただいまあー……」

私の声で玄関まで走ってきた雅と啓兎は

私の腕の中に居た子猫に釘付けになった。

ミルク色の毛の中に少し黄色が混ざっていてミックスかもしれない。

「お姉ちゃん・・・何処で拾ったの？」

雅が目を輝かせて言った。

「え、つとねー駅方面。」

すると啓兔が大声を出して私に向かって言うて来た。

「じゃ、じゃあうちで飼うの?!」

「え。いや・・・飼い主が見つかるまで。」

えー！と声をだす2人をみて子猫の鳴き声がかすかに聞こえた。

「・・・んにゃあ・・・」

「あ！鳴いたよ、雅にいちゃん！」

「あ、ほんとだあ！可愛いなあ・・・」

うつとりと見つめている雅に子猫を預け、

部屋に戻って着替えを始めた、時だった。

「よっ柚波！今帰ってきたのか・・・て、うわああ!!」

いきなり窓から静治が入って来た。

私は短パンにTシャツを来ている途中だった。

「あ・・静治、何で居るの。」

「え、あ、ごめん！着替えていたとは・・。」

彼女が居るといっても年頃なんだし、しょうがないかこの反応は。

「いいよ。従兄妹なんだしもう何回同じ風呂に入ったか・・。」

で、何の用？今日は気分がいいからあまり怒ってないだけなんだけど」

私が少し冷めたように言葉を放った。

静治はなんだか思い出したように言葉を返した。

「そう！なんか零羅ん家の猫がさ逃げたらしくて、

首にリボン付けてたってさ。」

私はそれを聞いて少し戸惑った。

「え・・もしかして白と黄色の？」

私が言うと静治はすぐさま答えた。

「そう！あれ？なんで知ってたの？」

あ、やっぱりそうなのかなあ・・・

私は言うか言うまいか迷ったがやっぱり言うっておかないといけな
だろつ。

「その子猫なら今うちにいるよ。雅に預けたけど・・・」

「やりいっ！今から雅に会ってくんぜ！」

そして静治は窓の淵から降り、私の部屋から去っていった。

なんだっただらろう・・・。

「えー！静治兄ちゃん！連れてかないでよう。」

「だーめ！この子は零羅のペット！」

雅と静治が口論をしていた。

子猫を連れて行くこととする静治の動きを止めようとする雅。

「あらら・・・雅、その子猫は零羅くん家のネコさんだから・・・

そっだ、今度零羅君に見せてもらいなよ。」

私は下のリビングで雅に言った。

すると静治が加勢するかのよう言葉を発した。

「そっだ！零羅に言えばまた会えるから！！なっ？」

「・・・うん。分かった、もう少し。」

「あれ？そっいえば啓兎は？」

「…………あれ、居なくなっちゃった。お姉ちゃん。」

雅はさらりと言った。その「居なくなった」の意味がすこし分からない。

「い、居なくなっただって？…まさか。」

すると雅は告げた。

「今さっき静治兄ちゃんが連れていっちゃった。啓鬼がどうしてもつて。」

「は、早くそれを言って！！！！！」

どうしよう……。私は零羅くんの家に行かないといけないの？！

……今会つのは若干気まずいのにいー！！！！

あ、でもネコさんには感謝……。私がノロいからこうやってチャンスを与えたんだろつ。

よし！！！！行こう！！

第9章「何処にいてもやっぱりイジメはついてくる。」（前書き）

かなり放置状態になっていてすみません！

塾とか塾とか塾とか・っつて言い訳はしませんが、

見てくださっていた方々すみませんでした！

見てくださるかた、お願いします！

第9章「何処にいてもやっぱりイジメはついてくる。」

「……………あれ。なんか間違えた？」

手には零羅くんの家までの地図と静治からのメモ。

メモには「零羅の家はフツーの家」と零羅君の家の住所が描いてある。

そして目の前には。

「……………どいっ！」

豪邸があったりする。

「まさか……………こじじゃあないよね。」

地図の位置と住所はここだ。

でもどうしてもメモと噛み合っていない。

気にしても仕方がないので表札を確かめて帰ろうとした。

《魅錠 勝人・雪野・零羅》

魅錠。この漢字は零羅君しか居ない。

そして思いつき「零羅」って描いてあるし・・・。

「こ、こだよ・・・ね」

勇気をもってインターホンを押そう・・・。

——ピンポーン。

誰が出るのか・・・。

『はい、魅鑑です。お名前とご用件を。』

突然と聞こえてくる声。反応に戸惑ってしまった。

「え、あ、あの！彫津名ですっ、弟がこちらにきでっっ」

やばい。こんなときに限って舌を嚙んでしまった。

恥ずかしっっ！！

『彫津名さんですね、零羅様をお呼びします』

（え?! ね、零羅さまってなに?! ・・・まさか零羅君ってお坊ちやま?!）

心の中でそう思いながら大きな門の前に突っ立っていた。

——ガガガガガッ

「うわっ!!」

イキナリ目の前が動き始め、びっくりして後ずさってしまった。

「なななっ、なんですかココの家は・・・」

『どうぞ、中へお入りください』

「は、はあ・・・」

啓兎が居ないから探しにきた、いや正式には迎えに来たはず・・・なんだけど。

この状況はなんですかあああ！！

すると玄関まで行った私の後ろから啓兎がニョっと出てきた。

「あ、お姉ちゃん！・・・来たの？もう帰らないといけないの？」

「うっ・・・」

零羅君の家の庭はすごく広かった。

うちの3倍くらいかな・・・。

洋風の家、バラやパンジー、チューリップ、コスモス。

花のアーチにカフェテリアにありそうなイスやテーブルの一式がそろえてある。

「お、柚波！おまえも来たのか？」

私が別世界に浸っていると後ろから静治の声が聞こえた。

「あ、静治っ。あんた啓兎連れて行くときは私に言いなさいよ。」
ふう、と溜息をこぼしながら私は言った。

「あはは、わりいな。あ、おーい！零羅ああ！」

体がビクンと跳ねた。その名前は今の自分にとって、かなりの禁句となってきた。

「そ、そろそろ帰ろっかなっ！！！」

「えええ〜まだ静兄と遊んでないよお」

ねだる啓兎を黙らせ私は逃げるようにして零羅君の家から出た。

—— たたたっ

「・・・はあ・・・あ・・・」ココまで走れば・・・」

「おねえ・・・ちゃん・・・はや・・・いよう」

そうだった。啓兎はまだ幼いのに私の速さに追いつこうと全力疾走で走っていた。

「ご、ごめん・・・ジュース飲もっ！」

「・・・!!うんっ」

ジュースを提案すると啓兎はすぐさまに機嫌を直した。

いや、機嫌を直したって言うか元気になった・・・？

「・・・んっ・・・くっ・・・ぶはああ・・・おいしー！」

啓兎は今買ったばかりの150mlの緑茶を10秒ほどで飲み干した。

「はやっ!!お姉ちゃんのは?！」

啓兎は舌を出しながら言った。

「ないよーうだ!お姉ちゃんが悪いんだよっ」

「ひっどーい!ちよっと位残しよう！」

結構幸せだったんだ。この時間。

久しぶりこうやって騒いだ。

学校ではイジメというものがあり、

リンチされるわ。犯されそうになるわ。未遂だけど。

それも今年は特に酷いし。

だから、ほかの人からにすれば普通でも自分にとっては幸せであるんだ。

「ああら。あんた彫津名？」

猫が喉を鳴らしたような声で私の後ろから声をかけてきた人。

「桜・・さん。なんですか」

少し目が悪い為、細めてしまった目をみて桜 衣豆乃は言った。

「へえ・・にらんだりする気。学習能力持てば？」

(てか別ににらんでないし。)

初めて会ったときも確かそうだった。

「静治、教科書みして。」

中学はじめ、同じクラスだった静治に教科書を見せてと頼んだときだった。

「おー。いいけど、忘れたのか？いつも数学だけなのな」

そう、いつも数学の教科書だけなぜか忘れる。

理由は1つ。学校に行く直前、いつも数学の教科書だけ玄関に置いて来てしまう。

自分でも気づかないうちにそうしていて何もいえない。

「・・・ねえあの子何様？」

「いつも静治くん教科書借りてさ。」

「わざとじゃないのお？」

少し前に座っていた女子2人がコソコソと話している。

誰か良く分からないくらい目が悪くなってきていたため目を細めて見た。

それを睨んだのと勘違いしたのだろう。

その片方がこっちに向かってきた。

「ちょっと、なに睨んでるわけ？ウザインだけど」

(別に睨んだつもりじゃ・・・)

「それにいつも数学の教科書だけ忘れて！！ワザと？！」

イキナリ大声を上げて私に怒りをぶつけてきた。

「大体あんた静治くん達にしか話さないじゃない！」

(達って誰・・・?)

その頃の私は雄耶くんとも零羅君とも話したことが2、3回しかなかった。

「あんたが居るから静冶くんに話せないじゃない!」

(よくわかんないけど・・・とにかく私が邪魔なわけだ)

私はいい加減うるさいと思った。そんなに言っただって意味ないのに。

「・・・うるさいので少し謹んでください。」

桜 衣豆乃は少し赤くなりイキナリ私の頬を叩いた。

バシッ!!!!!!

「・・・いた!」

「だ、大丈夫か?!」

静冶があわてて私の頬に触れた。

そして静冶は桜 衣豆乃の方を向いて言った。

「今正しいこと言っただけじゃねーかよ。殴んなくてもいいだろうが」

そのとき見せた静冶の表情は誰が見ても一瞬で凍りつきそんな顔だ

った。

「……大丈夫か？」

すぐに静治は私の方へ振り向き頬にハンカチを当てた。

「ん・・ありがとう。私ちょっと保健室で氷もらってくるわ。」

「ああ……。」

それからだ。私がリンチに会い始めたのは。

一人ではイジメの責任でも負えない見たいな顔でもしているのか。

「……おまえの弟かな。ちょっと来い。」

桜さんの口調はすっかりイジメモードだった。

そして桜さんの後ろには5人の女子。

全員私をリンチしていた女子だ。

「弟君。こっちに来いよ。」

後ろに居た1人が言った。

「すみませんが今から姉と帰宅するのでいけません」

随分とこどもっぽくない言葉で断られた桜さんは少し怒った。

「(啓兎、走って逃げるよ。)」

「(うん。)」

小声で啓兎に話しかけ、私と啓兎はタイミングを見計らって走った。

「あ、まで!!!」

(待つわけないでしょっつ!!!)

だだだだっ

やっとの思いで家に着いた私達は家の中でクーラーの効いた部屋で倒れた。

「え、お、お姉ちゃん?! 啓太?!」

雅がソファから飛び降り私達に声をかけた。

「……水。」

2人揃って同じことを考えていた。やっぱり姉弟だな。

帰ってきたのは午後6:00。

そしてアノ人から掛かった電話の時間は午後8:00。

第9章「何処にいてもやっぱりイジメはついてくる。」（後書き）

次回、初めてアノ人と会う!!

あ、電話の相手とは違いますよ。

電話の相手は皆さんがしって居るあの人！
お願いします！

第10章「何かが始まった。〜繋がりと始まり〜」(前書き)

また投稿が遅くなるかもしれませんのでご了承ください！
なんとか遅れを取り戻さないと・・・。

第10章「何かが始まった。〜繋がりと始まり〜」

午後6:30。私は熱が出た。

「うつうつ〜・あだまいだい（頭痛い）。らすけれ〜（助けて〜）。

」

うなされるように声を出して氷枕の上で寝そべっていた。

「なんで一緒に居た啓兎は熱がないのにお姉ちゃんだけ出すんだよ

お・・・」

溜息をつきながら雅はせつせと働く。

私家事をしない場合は雅が代わりにやっている。

そんなに出来ない日もないが、時々こうやって体調をくずしてしま
う。

正直言ってお姉ちゃんは役に立たない。

料理だって職人並に作れるくせに家ではまったく家事・・・もとい料
理は作らない。

「ごめん・・・みやびい・・・ういい・・・」

熱39度1分。そして今6:55。

「……熱が下がってきた。」

雅がポツリという。

「うん。少し頭が軽くなってきたあ……」

ぼわぼわする気分が楽園みたいだった。

() にはは……お花畑が見えるう……)

熱38度5分。今7:00。

「もう大丈夫っぽいね。高い熱だすわりには下がるの早いね。」

「うん。そういう体質だから……。」

雅は不思議そうに私の額に手を当てた。

「ふわー……雅の手冷たあい……」

「本当に大丈夫……?」

少し心配そうな顔で雅は言う。

「お腹空いたんじゃない?お姉ちゃんも降りてきなよ。」

そして雅は私の部屋を出て行った。

「・・・・・・・・・・また出たよ。熱が。」

この熱は月に1度に出る。

それは大抵が昼12時くらいから6時までにはいつも収まる。

でも今回は特別。

桜さんの姿を見たり声を聞くことが1日に10回を超えると

時々起こす、月に1度ならず2度、3度と。

「うーん・・・やっぱりイジメが原因かなあ・・・」

そんなことを考えながら私は階段を下りていった。

今7:40。そしてご飯を済ませるまでが7:55。

「うーん・・・食べたあ・・・雅のご飯は久しぶりだあ」

すると啓鬼が話しかけてきた。

「俺も一緒に作ったんだよ!!すごいでしょ!」

おお、あの味を啓鬼が?!・・・確かにすごい。私と同じくらい作れるしなあ・・・。

「うん、すごい。というかすごすぎて眩しいよ。」

啓兎はパツと顔を笑顔にした。というか自然に・・・。

「えへへ！でもお姉ちゃんもつまいよ。」

「ありがとう。・・・道理でモテる訳だ。」

最後に本音を一つ漏らし、部屋に戻ろうと思った。

ブルルルッ

「あ、電話。今でまーす」

今8：00。

私はイスから立ち上がって電話に駆け寄った。

「はいはい・・・もしもし、彫津名です。」

『魅鎧です。柚波さんはいらっしやいますか。』

掛かって来た相手は・・・アノ人だ。

「・・・柚波です。零・・・羅くん？」

私が返事をするると相手は少し戸惑ったように言った。

『え?!・・・あ、彫津名さん?・・・えっと・・・今日はありがとう。』

』

・・・私ってなにしたらっけ。

「あ……の……。ああ、ネコさんのこと？」

そつだ、零羅君の家の猫さんを拾ったのは私だ。

『うん、ありがとう。弟くん居る？えっと、啓兎くんだけ。』

「あ、うん……。今代わります。」

まさか零羅くんから電話が掛かってくるとは……。

「あ、そつだ。啓兎お！！電話あ！！」

「え、誰？女の子？……もしかして零兄？！」

はは、零羅君って「零兄」って呼ばれてるのか。

「うん。そつだよ。はい」

啓兎は嬉しそつに電話を受け取り零羅くんと話し始めた。

「うん！啓兎。……おお！すごい！……うん。うん！行くー！じやあねー！」

カチャン。

電話が切れた。

啓兎はなにを約束したんだろう……。

「あのね、零羅くんの別荘に泊まりに行くんだよ!」

「へえ・・・何人です?それ以前に誰と?」

少し気になるが多分、男の子同士で行くんだらう。

「えつとねえ、俺の家の人とお・・・零兄と静兄と雄耶さん!あと・・・紅葉おねーちゃん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい?・・・家の人って。」

「わわわわ私も?!雅とかおねえちゃんも?!」

笑顔で啓兎は答えた。

「うん!零兄がね、猫さんのお礼につて!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・決定事項つばいなあ。断れないのね。」

「い・・・いつから?」

「えつとね、夏休み初日から、1週間だつて。」

「どうなるのでしょうか、私は・・・。」

そして考えているうちに日は過ぎていき夏休みに突入した。

「……いしょつと。コレで全部。荷物降ろしたね。」

今、私たちはその別荘の前まで来ている。

荷物を降ろし終えてから再び目の前にある建物を凝視した。

「……別荘って……コレえええ?!?!?!」

でか!大きい!!大きすぎる!!普通の家のは50倍程度あるから!!

「……本当にこんな所に居ていいのかな。」

少し不安になってきた。

気づけば雅と啓兎が居なくなっている。

「え?2人とも何処行っただ?」

すると別荘の玄関前に2人らしき人と男の子が立っていた。

男の子のほうに見覚えがあった。

「……あ、ま、まさか!」

私は玄関まで走った。

そこにいたのは――私のパートナーだった。

説明しよう。私が小学生の頃、アメリカに行っていたことは知っていると思う。

私が通っていた大学は私世代の子は数人しか居なかった。

そしてその大学は必ず「パートナー」を見つけて一緒に研究などを進めていた。

今日の前に立っている男の子は・・・。

その頃出会った、私が初めて大学で心を開いたたった1人のパートナーだ。

大学を卒業した後は連絡すらとっていなかった。

でも今頃会えるとは・・・思いもしなかった。

「秘粹！！なんでここに?！」

彼の名前は猪宮 秘粹（いのみや ひすい）。

私と同じく13歳で、日本に居るとは聞いていたけど。

・・・そういえば秘粹は家用ジェット機があるんだっけ。

研究や、活動。秘粹と過ごしたのは週に1、2回だった。

平日は日本に帰っていたらしいし。

「・・・じゃなくてえ！！なんでココにいるの?! 零羅くんの別荘でしょ?」

混乱してるなかでまた混乱させないでえ!!

「だよな! 静・・・治・・・。居ない・・・。」

「おう! 柚波、元気だったか?」

陽気に話しかけてくる秘粹に少し苛立つ。

「人の話を聞け!」

「・・・秘粹は俺の従兄妹だよ。」

別荘の中で私が零羅くんに言った一言は「なんで秘粹が居るの」。

その返事がコレ・・・。

(い、従兄妹って・・・マジですか!!!!!)

本気でびっくりしたのである。

「そういえば静治達が見当たらないんだけど・・・」

「あ、ああ。あいつ等は温泉に行ったけど?」

へえ・・・温泉かあ。・・・って温泉?!!!

「お、お、温泉って?!」

びっくりの連発。

「ん、この別荘って温泉付なんだよ。」

びっくりだあ・・・温泉付って何処の金持ち・・・?

波乱な一週間になりそうです・・・。

第10章「何かが始まった。く繋がりと始まりく」(後書き)

初登場！秘粹です。

秘粹に関してはまたいつか・・・。

次回から何気に旅行編です。

またしても柚波は痛い目にあうのでしょうか・・・。

第11章「何かが起こる。〜記憶の暴走〜」(前書き)

少しシリアス系になっています。

でも次回はずこし恋愛チックですので。

すみません！

第11章「何かが起こる。〜記憶の暴走〜」

「……………うわぁ。何これ」

目の前にあるのは豪華な魚料理とお鍋。

焼肉セットとお寿司。

「いったただつきまーす!!」

私以外の人はそんなことをかんがえていないのか…。

いつせいに食べ始める。

そして私は何か足りないような気がした。

「…あ、ねえ静治。紅葉さんは?」

静治は魚料理を豪快に食べていた。

「あ。ほういへは(そういえば)…。ははほふへんはほ(まだ温泉だろ)?」

言っていることを勘で理解し紅葉さんを探した。

「もーみーじーさん!!」

大浴場に来て見ると紅葉さんの姿はどこにも見当たらなかった。

「どこだろ・・・あ」

人影が見えた。

温泉の中から人があがってくるのが見える。

「あ、紅葉さつ・・・え。」

人影の正体は。

まさか・・・。

「え、あ、ご・・・ご」

ゴメンなさあああい!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

中に居た人影は・・・零羅くんだった。

—————
バタンツ

走って浴場の脱衣所まで行った。

そして勢い良くドアを閉めその場に座り込んだ。

「・・・あ、あ、終わった・・・。本当にごめんなさい・・・」

熱くなった頬を押さえながら私は心のなかで何度もあやまった。

すると浴場のドアが開いた。

「あれ？袖波じゃない。どうしたの？」

「あ・・・紅葉さん」

本物登場！。

・・・じゃなかった！

「どどどうしよう！紅葉さん！やってしまった！」

いきなり大声を上げた私に驚いて紅葉さんは一歩引き下がった。

「え、あ、なななに？」

「・・・じ、実は・・・。」

「・・・なるほど。零羅の奴・・・、この時間には入るなって言ったのに。」

・・・なんかひっかかる言い方だな。

「あ、あの紅葉さんって零羅さんと仲がいいんですか・・・？」

「え?! いい、いや、全然よくないよ?!」

かなり怪しい。

と、思って逃げよとする紅葉さんのタオルを少し触った。

——ハラッ

「……………あ。」

……………やってしまったああ……!

「……………めんなさい……!」

ああああ! 果たしても! ……でも相変わらずナイスバディだな。

「……………紅葉さん。すいませんでした。」

「いや、いいんだけど。」

着替えの浴衣を着て紅葉さんは言った。

少し赤くなった頬が少しずつ冷めていった。

「……………で、なんか隠してませんか?」

少しずつ近づいていく。

「あ、いやあ……………その……………」

「なんですか?」

「……………ごめん!!!!!!!!!!!!!!」

紅葉さんはダッシュして脱衣所から逃げ出した。

「あ、待って!!」

生憎、脱衣所の外は紅葉さんが走った後。

水が滴っていて滑りやすい。

そして私は見事に転んだ。

「え、わ、うわ!!」

——ドサッ

「……………痛……くない。」

あれだけ派手に転んで痛くないって……。

「……………大丈夫?」

ん?なんか下に違和感が……。

……………零羅くん?

「えええ、あ、ううごめん!!」

私の下敷きになっていたのは零羅くんだった。

ていつかなんで下敷きに？

「・・・あの、退いてもらえる？」

下から少し苦しそうに零羅くんが言った。

「あ、う、うん」

なんで今日はこんなに運が悪いのかなあ。

・・・そうだ。零羅くんに聞いたら分かるかな。

「ねえ、零羅くんって紅葉さんとどんな関係？」

「え。」

少し青くなって零羅くんが呟く。

「だからどんな関係？」

「いや、どくなって言われても・・・」

シドロモドロになって目を泳がせている零羅くんの顔を無理やり私の方に向けた。

「じつちを見て言って。」

・・・あ、私何してるの？！

こんなことしたら自分から誘ったみたいでしょ！

「あのごめ、零羅ああ！！！！お前紅葉さんとどういう関係だあ
あ！！！」

いきなりの怒声に私たちはびっくりしてそのまま飛んでいくかと思
った。

「……せ、静治？」

「どうしたの？…イキナリ。」

私は何で静治がそんな事を言うのか少し気になった。

「お前たちが話してるのが聞こえたから…隠れてたら…。」

私の言ったことを聞いてたわけだ。

「で、どういう関係だ！！！」

静治は零羅くんの襟元をつかんだ。

そして零羅くんを軽々と上に引つ張った。

「う、わ！待て待て、ギブ！！！」

「いいや！待たん！早く言え！！！」

少し零羅くんが可哀想…。

天に届くくらいに高い……。色んな意味で。

あれ？でももし紅葉さんが零羅くんの元カノだったりしたら？

ズキッ

あれ？なんか心臓付近が痛い……。

なんだろ。

「だーからあ早く言え！」

「分かった！分かった！！言うから！話せ！」

どれだけ修羅場？

静治も落ち着けばいいのに。（人のこと言えないけどね）

「……はあ、はあ……。殺す気か。」

「お前が早く言えばいいんだよ。」

いや、アノ状態で言えってかなり困難だ。

「紅葉さん……じゃなくて、紅葉は俺の実の姉。」

なんですと？

元カノじゃなくて実の姉？

あはは、ヨカッタネ。

・・・じゃなああい！！

「え？なに?! 実のつて零羅くんの親つて再婚？」

「え・・・いやそうじゃないんだけど、俺つて孤児なんだよ。」

初めて知った。

零羅くんつてなんか昔から恵まれてた子かと・・・。

でもなんか聞くのもつらいな。

「・・・俺の本当の両親は俺が3歳の時、アメリカの研究所で原因不明で死んだ。」

ドクン。

アメリカ。

3歳。

つまり私の留学期間中。

そして「研究所」。

「そ、うなんだ・・・。」

「それで孤児院に連れてかれてさ、そこで1年世話になった。」

・・・あれ。そういえば私って留学期間は1年だったはず。

なんで3歳の時に留学したなんて思ってるのかな？

2年前より前は日本にいたんじゃない・・・。

記憶がおかしくなってる。

どうなってるんだろう。

「で、なぜか貰い手が山ほどあったらしくて。でも半数以上が俺の顔狙い、だって。」

「そんな・・・ごめんな。疑ったりして。」

静治はやっと落ち着いたのか

赤くなっていた顔を少しずつ冷やしていった。

「別にいいんだけど・・・あれ？彫津名さん、顔が真っ青だよ。」

私の顔からは血の気が引いていた。

そして段々と意識が遠くなっていく。

「?!!!・・・おい！柚波?!！」

私は意識が遠ざかる中、

零羅さんと静治の声をずっと聞き続けた。

嵐の中で一人捨てられた日。

心に焼きついた風景。

研究所に積まれた多くの死体。

こもる様な薬と血の匂い。

真っ白な床に広がった慌しい青の液体が

私の体にまとわりつく感触と生ぬるい暖かさ。

目の前にあるものは全てが残酷に見えたあの研究所。

此処にあるもの、研究所に連れてこられた人間。

全ての人が美しく綺麗な人間ばかりだった。

連れてこられた人間は皆、研究の材料としか見られない。

研究員の私でさえ研究の「材料」としか扱われなかった。

この研究所の管理者が本当に信頼している

そしてこの禁断の研究をしている人間だけが助かった。

材料の人間は薬漬けにされ要らなくなると殺される。

その死体をさらに研究に使って禁断の研究をしようとした人間。

嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い

そしてだれよりも憎い。

「やめて！私の娘だけは！！・・・。」

娘を連れて行かれるのを嫌がった母親は殺される。

美しい人間ならば連れて行かれる。

そんな研究所に私は居た。

殺されることを嫌がり逃げようとしたけれど大人には勝てない。

初めて入った学校でこの研究所に無理やり引き込まれた。

そんなとき、その研究所を見張っていた警官に研究所は取り締まられた。

その警官から学校本部へと連絡が行きすぐに研究所は閉鎖された。

「大丈夫かい？お穰ちゃんまだ小さいのに大変だったな。」

「はやく病院へ運ばなきゃ！」

私たちを救ってくれたのは「丹納（にのう）」夫婦だった。

2人が居なかつたら私は死んでいたんだろう。

私たちが解放されて1ヶ月。丹納夫婦の死が知らされた。

あの研究所で捕まっていた人々は皆すごく悲しんだ。

あの人たちが私たちの恩人だった。

一生に変えても恩返しをしたかった。

「二ノウは原因不明の死。閉鎖した研究所の前で倒れていたそうだ。」

このあと私はすっかり記憶を失くし療養をすることになる。

私以外の兄弟は皆でもう一つの生物学専門の学校へ

通っていたため何の被害もなかった。

7年後。

私はここからのことしか覚えていなかった。

このときに私は秘粹と出会った。

アメリカで大学に飛び入り合格。

そして零羅くんや雄耶さんに出会い、

紅葉さんにも出会えた。

そして記憶を失くしていた間のことは

お姉ちゃんが日本で暮らしていたと言った。

私はすんなりと受け入れた。

私はあの残酷な記憶を封じる為に自分の記憶を創り換えたんだ。

第11章「何かが起こる。〜記憶の暴走〜」（後書き）

評価お願いします！

あと悪いところ・良かったところなどドンドンお願いします！

第12章「引っかかるモノ。付き物は必ずある。」（前書き）

一応これで完結です。

まだシリーズ自体は続かせますが、題名は変わりますので……。

あとがきのお知らせを読んで置いてください。

ありがとうございました。

第12章「引つかかるモノ。付き物は必ずある。」

頭に少し冷たさが響く。

誰かの手が私の顔に触れる。

暖かくて心地よい。

「……彫津名さん。」

微かに聞こえてきた声は確かに零羅くんの声。

私はゆっくりと瞼をあけた。

「……ん。零……羅くん。」

「……彫津名さん……目が覚めた？」

心配そうに覗き込んでいる顔が少しだけ泣きそうだった。

「……大丈夫？「袖波……！目が覚めた？！大丈夫……？」

ドアがいきなり開き外から紅葉さんとお姉ちゃんが入ってきた。

「あ……だ、大丈夫です。」

お姉ちゃんが心配そうに聞く。

「ほんと？・・・柚波は学校でストレスたまってると思って此処に連れて来てもらったけど・・・」

お姉ちゃんが言う。

「うーん・・・少し裏目に出ちゃったかしら？」

紅葉さんは少し困った顔で呟いた。

「あ、ちがうんです。なんか昔の記憶が少し頭で・・・」

「?!?!」

お姉ちゃんが目を大きくして壁にもたれ掛かった。

「・・・まさか思い出しちゃった？あの記憶。」

お姉ちゃんは今にも泣きそうな声で言う。

「うん。あれは・・・今より地獄だったね。」

「アレ？あれってなんなの？」

紅葉さんは戸惑いながらも疑問のほうが大きいのかスマートに質問する。

「・・・私の過去は少しぐろいですけど。」

少し苦笑いして私は思い出したことを話していった。

そしてその警官の名前を出す前に聞いておく。

「……もしかして、零羅君たちの元の苗字って「丹納」ですか？」

それを聞いた2人は少し肩をびくつかせていった。

「……そうだよ。なんで知ってるの？彫津名さん」

零羅くんは驚きを隠せないようだ。

顔が真っ青になっている。

紅葉さんの方も少しだけ血の気が引いている。

「……私の命を助けた恩人ですよ。」

その言葉に2人の顔が見る見ると変化していく。

真っ青だったのにいつの間にか涙を流していた零羅くん。

少し思いつめた顔で私を見る紅葉さん。

「……そうなの。あなたが……両親が死ぬ10分ほど前。」

「俺等の親父からさ電話があって、俺ぐらいの仔を助けたって。」

それが私なのだろう。

「それで・・・その電話のあともう一回掛かってきた。でもそれは・・・」

「そう、お父さんじゃなくてお父さんとお母さんを殺した男。」

その男は多分研究室管理をしていた上級クラス。

「そいつが言ったんだよ。（この男が死んだのはあの小さい娘のせいだ）って」

私のせいにしたがっていたのか犯人は。

「それで、その日に誓っちゃったの。その娘を捕らえるって・・・ね」

そこまで話した紅葉さんの目には私への優しい瞳。

紅葉さんには今私を捕まえようとはしないのだろう。

捕まえてもどうしようもない。

「・・・彫津名さんのせいじゃない。男が仕組んだ罠だったんだな。」

零羅くんは少し瞳を潤ませてぽつりと言う。

そういえば今ふと思いだした。

なんであの研究所に入ったか。

あの時はまだ幼かったけれど。

それでも私なりに恋をしていたんだ。

やっぱり恋にイジメはつき物なのかな？

私はそれからなんだかんだで旅行を楽しんだ。

そのあと帰宅して思う。

これから色んなことが起きるのだろう。

そもそもあの事件だって私が居たって居なくたって起きてただろうし。

零羅くんや紅葉さんに会ったのだって偶然なんかじゃない。

これからどんなことがあるのか。

イジメはどうなるのか気になるけど。

精一杯人生を歩みたい。

そんな気分になった。

*。 END。 *

第12章「引っかかるモノ。付き物は必ずある。」（後書き）

くお知らせく

「恋にイジメは付き物ですか?!」をお読みいただきありがとうございます。ざいます。

今回で一応第一シリーズ完結です。

なんでこんなところで切っちゃうか。

それは・・・なんででしょう。《-w-》

でもまだ続きます。

次の題名は変わります。

でも、「恋にイジメは付き物ですか?!」のキャラはまだまだ引っ張ります!

主人公は変わりませんよ?

まだ出てきていないキャラいますし・・・（草野先生まだ出てないです。）

少しは普通の学園ライフ送らせてあげたいです。

ではまたのご機会に〜（-3-）

次回題名はまだ決まっていらないのですが……。

活動報告で題名を募集したいのですが、よかつたらお願いします。

それでは……。第1シリーズを読んでくださった方々。

ありがとうございました。

柚波「この話よんでくださって本当に感謝します。」

……あ、台詞盗られた。

零羅「これからもみていただけたら嬉しいです。」

ああ！また盗られていく！

わたしも占めなければ……。

では本当に本当にありがとうございます！

そしてこれからもよろしく願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4482/>

恋にいじめは付き物ですか?!

2011年10月7日03時51分発行